



ヨーロッパ・アメリカ 39 日間 18 都市街歩き

一旅日記こぼれ話一

横浜市の海外研修で、1985 年 11 月 14 日から 12 月 22 日までの 39 日間にわたり、アーバンデザインに関する調査のためヨーロッパとアメリカの 18 都市を廻り、街並みや建築物の視察と、公的機関で制度や事業についてのヒアリングを行った。

これは、その旅日記とこぼれ話である。

当時はまだ、都市デザインに関する海外の情報が、今日のように様々な方法で入ってくる時代ではなかった。具体的な事例を学べる手段は、専門雑誌などに紹介されている写真や記事を見るぐらいだったが、日本では体験できないそれらの都市空間を、実際に体験してみたいという気持ちを常に抱いていた。

横浜市の海外研修は、一定の旅費と期間を与えられ、自分で公式訪問を含めた計画と段取りを全て行い、一人で海外を訪れる制度であった。

5 回目の応募でやっと派遣が決まり、横浜新都市センターの超突貫工事を無事に仕上げてから、関係する資料を改めて整理検討し、具体的な計画づくりを行った。

詳細な調査と計画作成、海外との連絡や諸々の準備を行い、出かける時期は 11 月中旬になった。

その時期、ヨーロッパとアメリカは寒い上に昼間の明るい時間が短く、視察には条件が悪かったが、クリスマスシーズンに入るため、街は、夜美しく輝く時期だともいわれて期待を膨らませた。

海外にはほとんど出たことがなく、また初めての欧米訪問のため、積年の思いを欲張って盛り込んだ。

その結果、ヨーロッパはイギリス、ドイツ、イタリア、フランスの 13 都市、アメリカは 5 都市を航空機と列車を利用して巡る、予備日も無いハードスケジュールになった。

そして緊張と期待が入り混じった気持ちで、成田発アンカレッジ経由のロンドンヒースロー行き BA006 便で出発した。



ウェストミンスター寺院前で(当時は石が汚れていた)

生まれて初めてのヨーロッパ、その最初の訪問都市ロンドンは、曇天の天気が続き、黒く汚れた石やレンガの歴史的な建物や重厚な街並みのせいか、重く暗い街という印象だった。

宿泊したホテルは、トラファルガー広場に近い、チェアリングクロス駅の上にあるホテルの最上階で、ハトの羽ばたきと鳴き声と、駅のアナウンスに悩まされる毎日であった。

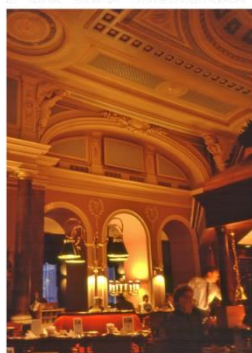


チェアリングクロスホテル (1階が駅になっている)

海外のホテルでの初めての朝食は、豪華なインテリアのレストランで玉子やソーセージなどのあるイングリッシュブレックファーストというのを食べた。

昼を過ぎてもおなかが重く、翌日からはコンチネンタルブレックファーストというので済ませた。

朝食に二種類あるのを初めて知った。



クラシックなレストラン

昼食は、日本の蕎麦に代わるようなものは何かないかと現地の日本人に聞いたら、サンドイッチがあると教えてくれた。

あちこちにサンドイッチ専門店があって、パンと具材の種類が豊富に並べてあり、好きな組み合わせを頼むと目の前で作ってくれる。

とても美味しくて、日本にもこういう店があればと思った。

朝7時ではまだ薄暗く、夕方4時には暗くなり始め、4時半には真っ暗になってしまうので、時間を惜しみながら連日暗くなるまで精力的に歩き回った。

夜の街は日本より暗いという感じだが、主な通りはクリスマスの飾りつけのイルミネーションや、歴史的建造物のライトアップで、温かい賑やかな雰囲気に演出されていた。



イルミネーションやライトアップで飾られる夜の街

7 日間の滞在期間中、予め調べておいた市内の様々な通りや広場、歴史的建造物や新しい建築物、公園などを、地下鉄の路線図と「AtoZ」の地図を片手に歩き回った。

環境省では、ロンドン市内のセントポール寺院への視界を妨げないための高層建築の規制に関する施策について、またGLC (Greater London Council) では、テムズミードのニュータウン計画についてのヒアリングを行った。



環境省よりの眺め

左手にウェストミンスター寺院、右手にビッグベン

そして日本大使館の外交官や、企業の駐在員などとも情報交換が出来た。



ICE

ロンドンからハンブルグへは LH041 便で飛び、10 日間ドイツの北から南の 7 つの街を、ユーレイルパスを使って ICE (Intercity-Express) という特急列車で移動した。

ドイツ国内は、南に下っても高度が高くなるせいか、どこも雪模様であった。

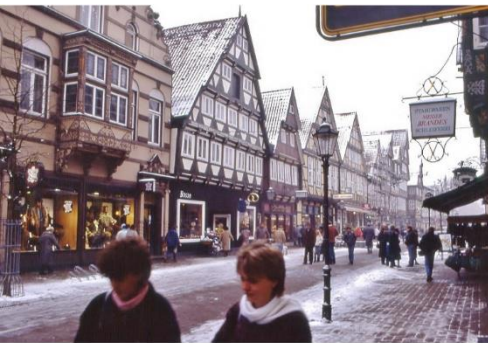
街歩きには不自由な条件であったが、夜になると、雪景色の中に建物の灯が美しく反射して、絵本から飛び出したようなロマンチックな風景に出会うことも出来た。



運河沿いのアーケード

ハンブルグに着いた日は冷たい雨模様の日だったが、運河沿いの街が美しかった。

そして翌朝起きると、一面の雪景色に変わっていた。



雪のツエレ

世話になった横浜市の駐在員が、車で一時間程のツエレという街に連れて行ってくれた。

予定に入っていなかった街だったが、ハーフティンバーの建物が立ち並ぶ雪景色の中の歴史的な街並みは、まるでおとぎ話の世界に迷い込んだようだった。

雪の中を、多くの人々で賑わっていた。



復元されているハノーバーの街並み

次の訪問都市のハノーバーでは、友人が紹介してくれたハノーバー大学の建築科のラントツエッテル教授が街を案内してくれた。

ハノーバーだけでなく、ドイツには戦災に遭って破壊された街並みを復元し、歴史的な価値を伝えている街が多いと聞いた。

そして街歩きの後、自宅に来ないかという言葉に甘えて訪問した。

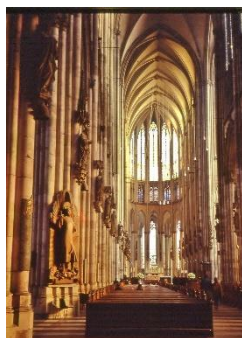


ラントツエッテル夫妻

建築家の自宅らしいモダンな家に案内され「ビールにするかお茶にするか」と聞かれ、とっさに大学時代の第二外国語のテキストにあった「Ich trinke nicht bier, sondern tee.」という一節を思い出し、しゃべってみたら通じたようで、「ドイツ語をしゃべれるのか」といった表情で苦笑いをし「自分が案内した時に話した英語は理解できたか」と聞かれ「もちろん、よく分かった」と英語で答えた。



ケルン大聖堂と現代建築の博物館



ケルンでは世界一高い尖塔をもつ大聖堂や周辺の街並み、ライン川沿いの遊歩道などを視察した。

大聖堂の外壁は汚れていたが、その内外のスケールの大きさには圧倒された。

大聖堂に隣接して建てられている、現代建築の博物館には違和感を覚えた。



クリスマスマーケットに変身した市役所前の広場



ボンの中心部は歩行者空間が広がって、賑わっていた。

宿泊したホテルに面した市役所前の広場は、一夜にしてクリスマスマーケットに変身した。



バードゴータスベルグの再開発

ボンの南、4 kmほどのバードゴータスベルグにある、建築雑誌に紹介された再開発施設を見に電車で出かけた。

丘の上の古城ホテルに向かう広い緩やかな階段を中心に、道路や建物などの全てを徹底してレンガで仕上げた施設で、その建築物と環境の構成が一体となっている様子を、是非見たいと思っていた。



ハイデルベルグの古城からの眺め

ハイデルベルグは、博物館になっている丘の上の古城へ、雪の坂道を歩いて上った。あまり人は来ていないのではと思ったが、それでも 10 人ほどの館内ツアーで見学した。

一望に見下ろすネッカー川沿いの街の姿が美しかった。

そして、次の目的地ステュットガルトへ向かおうとした時にアクシデントが起こった。

ハイデルベルグの駅で列車に乗るまで間があったので、屋根のないプラットホームのはずれにある小さな待合室で一人、絵ハガキを書いていたがなかなか列車が来ない。

そういえば時々、駅のアナウンスが遠くで何か言っているのが聞こえる。ドイツ語で何を言っているのか全く分からなかったが、時間を大分過ぎても列車が来ないし、アナウンスがあるのも珍しいことだと気が付き、跨線橋を渡って駅舎へ戻ると、そこは大混雑の状況だった。